

Title	紅いドラゴンの行方： ウェールズ伝承およびアーサー王年代記におけるドラゴンの表象
Sub Title	The red dragon in early Arthurian chronicles : its transformation and political implications
Author	不破, 有理(Fuwa, Yuri)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2008
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.52 (2008.) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	<p>The Red Dragon has closely been associated with the Welsh national identity, but this symbol does not appear in actual form in the Union Jack today. This paper first traces the changes of the dragon both in meaning and form, and then discusses its political connotations in early Arthurian chronicles. The "dragon" in the Old Testament denotes a variety of animals such as fox and whale, while in Greek and Latin it simply refers to a serpent without wings. In the Ancient Roman period, the "dragon" came to have a meaning of "a battle standard" as well as "a mythical creature." But as British Latin sources such as Gildas demonstrates, only the Welsh language adds the meaning of "a war leader" to the word, as is seen in the example of King Arthur's father, Uther Pendragon, "the chief of the war leaders." The Red Dragon in Nennius is emblematic of the British people. The red dragon is, in short, the symbol of military resistance. On the other hand the White Dragon stands for the Saxons who eventually defeat the Britons. It is generally believed that Arthur fought against the Saxons and wore the dragon on his helmet. However, neither of Arthurian chroniclers such as Geoffrey of Monmouth, Wace, and La3amon mentions the red dragon as Arthur's standard. Both the red and white dragon suffered arbitrary interpretations during the twelfth-century under the Norman rule. The present paper argues that Cadwaladr, the last British King, who is also the last Breton hope and thereby linked with the resistance of the red dragon, was the Norman's main political concern. Their suppression of the symbolic power of the red dragon as British icon was more concerned about Cadwaladr than about</p>

	Arthur.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20080331-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紅いドラゴンの行方

——ウェールズ伝承およびアーサー王年代記
におけるドラゴンの表象——

不 破 有 理

英国のウェールズでは今なお、その威容を誇示するかのような「紅いドラゴン」を目にすることが多い。ウェールズの旗（図版1）に納まった紅いドラゴンは有翼有足で闊歩する勇猛な容姿を備えている。紋章学的に言えば、このドラゴンは空を制するであろう見事な翼、鋭い鉤爪、蛇のような鱗に蔽われた胴体の組み合わせから、グリフィンの図像に極めて近い。政治的には、ウェールズは連合王国（the United Kingdom of Great Britain and Northern Ireland）の一員であるから、いわゆるユニオンジャックの下に統合されているはずである。しかし、ユニオンジャックの図柄はイングランド、スコットランド、北アイルランドの各守護聖人のシンボルの総体として統一国家の表象と考えられるが、不思議なことに、グレー



図版1（城郭を飾るウェールズ国旗の紅いドラゴン

Data Wales より）

トブリテンの構成員であるウェールズのシンボル、紅いドラゴンは現在の英国国旗を見る限り、その痕跡すら留めていない¹。確かに、紅いドラゴンはプリンス・オブ・ウェールズであるチャールズ皇太子の記章に申し訳程度の図像が登場するが、紋章本体ではなく盾を下支えする記章というマージナルな存在である。紅いドラゴンはどこからウェールズの「国旗」におさまり、どこに姿を消したのか²。

本稿ではブリテン島におけるドラゴンの系譜を簡単に触れたのち、ウェールズのドラゴンと結びつきが強いアーサー王伝説の年代記を分析しつつ、ドラゴン探索の一步に踏み出したい³。

1 ブリテンにおけるドラゴン

1 ドラゴンの形態の変容

ドラゴンという言葉から連想されるイメージは、時代や地域によって異なる。ドラゴンは通常「龍」と訳されるが、ドラゴンと龍とは似て非なるものである。簡単にいえば、東洋の龍は往々にして人に福をもたらす存在であり、水との連想が強い。しかるに西洋のドラゴンは、といえ、聖人に槍で刺し抜かれ退治される悪魔の姿として図像学的に記憶されている。つまり、悪の具現化された姿がドラゴンなのである。この場合のドラゴン

-
- 1 森護『紋章学辞典』（大修館書店、1998年）。グリフィンの図像は p. 101、チャールズ皇太子の紋章は p. 224 参照。
 - 2 現代のウェールズ国旗として紅いドラゴンが認められた経緯は、以下の書によると 1958 年にウェールズ吟遊詩人の集会（the Gorsedd of the Bard）からの要望に応え、翌 1959 年にエリザベス二世が認定したという。Carl Lofmark, edited by G. A. Wells, *A History of the Red Dragon* (Llanwrst, Wales: Gwasg Carreg Gwalch, 1995), p. 74.
 - 3 本稿は科研費基盤研究（A）による国際比較神話学シンポジウムにて行った発表“Metamorphosis of Dragons in Arthurian Context”（2004年9月5日）に加筆訂正した。本稿では十分に扱えなかった初期ウェールズの文献と1200年代以降のドラゴンとアーサー王伝説の政治・社会的変容については稿を改めて論じたい。

には翼があり、その翼は鳥の羽毛ではなくコウモリのような翼を持ち、足には鉤爪、身体は鱗が覆い、火を吐いて相手を襲う怪物とされている。しかしながら、この図像学的なイメージとドラゴンが一致するのはかなり後のことではないか⁴。言い換えれば、「ドラゴン」ということばに対して形状の異なる様々な怪物が想像され描かれていたと考えられる。実際、欽定訳聖書によれば、ドラゴンに対して「巨大な鯨、鮫、蛇、鱒、やまいぬ」(創世記1:21、詩篇74:13)という陸海両方の「獣」が訳出されている。ドラゴンという語で呼ばれる怪物には、どのような獣性を含めるのか、ドラゴンとヘビを同列に扱ってよいのか、ドラゴンの形態を点検する必要があるようだ。

現代のウェールズのシンボル、翼のついた紅いドラゴンは、紋章学の図像や中世の「動物絵画」(bestiary)で流布したグリフィンやワイヴァーン(wyvern)などの幻獣の姿と酷似しており、このイメージは中近東の古代鉄製器の装飾などを通して西欧に伝播した可能性も指摘されている⁵。一方、翼のないドラゴンも存在する。12世紀頃建築の北欧の教会には、名古屋城の金の鯨矛のように屋根を飾るドラゴンが残存する。天に向かって威嚇的に身をのけぞらせるドラゴンは魔よけとしての機能をしのばせる姿である⁶。古英語の英雄叙事詩『ベオウルフ』に現れるドラゴンは塚に潜み、宝を守る任務を負う古代ギリシアにみられるようなドラゴンである。その形態は、火を吐き鱗が身体を覆うといったドラゴンの定番のような外見に思えるが、宙を舞うとの表現はあるものの、翼を示す語彙はみあ

-
- 4 このような図像学的なドラゴンのイメージが一般に膾炙するようになったのは、聖ジョージによるドラゴン退治のイコンに依拠するところが多いと思われる。時代的には15世紀以降の作品が多い。
 - 5 この点については多摩美術大学鶴岡真弓氏にご教示いただいた。
 - 6 鶴岡真弓『装飾の神話学』(河出書房新社、2000年)。(「驚異のドラゴン」図④および⑥)

たらない。作品中にドラゴンの言い換えとしてヘビなどの爬虫類を表わす語 (wyrm) が頻出しており、表現から判断する限り、ヘビ型の怪物と考えられそうである。

ブリテン島に伝わる古文献でドラゴンへの言及が多いのは聖者伝である。ドラゴンが登場する最古の聖者伝のひとつが聖ヒエロニムスによる『聖ヒラリオン伝』(*Vita S. Hilarionis*) であろう。390年ごろの作といわれる『聖ヒラリオン伝』に「驚くほど大きなドラゴンを人はボア=おろちと呼んでいる」(“*Draco mirae magnitudinis, quos gentili sermone boas vocant*” 下線筆者) という一節がある⁷。ドラゴンはヘビと同義に用いられていることから、この作品においてもドラゴンは形態的には爬虫類で手足のないヘビ型を想定していると考えられる。また語源を遡りギリシャ語に原義を求めれば、「*drakon*」は普通のヘビ」である。ラテン語の“*draco*”においてもギリシャ語の原義を留めてはいたが、ラテン語にヘビを意味する“*vipera*”という本来語が存在したために“*draco*”は詩的用法に用いられることが多くなった⁸。従って空想上の生き物ドラゴンとの意味合いも強くなったようだ。Christine Rauserによれば、破壊的なドラゴンが現れる聖者伝において、現存する文献では4世紀から7世紀までのドラゴンの形態はヘビ状で「生息地」は洞窟が中心であった⁹。ドラゴンが水界とつながりをもつのはウェールズ出身の聖サムソンからのようである。8世紀の聖サムソン伝では川を住处としたヘビが9世紀には海へと設定が移動している。ブリテンに残る聖者伝におけるドラゴンは、古代ギリシアのドラゴンのように室に近寄る者に対して威嚇するのではなく、棲息する隠れ処から近隣に出向き住民に直接危害を加える。そのため聖人にご登場いただき、

7 Christine Rauser, *Beowulf and the Dragon* (Cambridge: D.S. Brewer, 2000), p. 180.

8 ギリシア語とラテン語のドラゴンの意味については、Faculty of Classics, University of Oxford の Dr Neil Mclynn にご教示いただいた。

9 Rauser, p. 65 and p. 174.

めでたくドラゴンは退治されるという聖人の引き立て役を担わされているのである。ドラゴン退治の聖人伝が、ほぼブリテン島へのキリスト教布教の時期と重なっている点は示唆的である。初期の聖人伝に共通する説話構造は聖人がドラゴンを退治する際にほとんど武器を用いず、「ことば」の力によって洞窟に潜むドラゴンを引きずり出し、海へ追放するというパターンである。アイルランドの守護聖人である聖パトリック (St Patrick) にはアイルランドから毒虫とヘビを追放したという逸話があるが、この毒虫・ヘビにあたる表現“vermin”、“serpens”などはドラゴンと互換性のある語として用いられるラテン語の語彙である。聖人伝のドラゴン退治の作話意図から推測すれば、「毒虫・ヘビ」は土着の宗教を信仰していた異教徒を示していたと十分に考えられる。ことばによるキリスト教の布教によって行き場を失った異教徒たちは海に追放されたか、実際に死を遂げたのであろう。怪物ドラゴンの生い立ちは異教を信じる土着の民であったことを聖人伝は示しているといえそうだ。

2 ドラゴンとは何か？

ここでドラゴンの歴史的な字義を確認しておきたい。たとえば 19 世紀の羅英辞典は“draco”を以下のように定義している。¹⁰

draco

I. A. a kind of serpent, a dragon (those of the tame sort, especially the Epidaurian, being kept as pets by luxurious Romans)

B.1. As the guardian of treasures

2. the guardians of the infant Nero

II. A. Name of a constellation

B. A cohort's standard

10 Rev. John T. White, and Rev. J. E. Riddle, *A Latin-English Dictionary in Two Volumes* (London: Longmans, Green, 1872).

C. A sea-fish

D. A water-vessel shaped like a serpent

E. An old wine-branch

また“draconarius”として、II. Bの「歩兵隊の軍旗」から派生した「軍旗の旗手」「A standard-bearer」の意味を挙げている。第一の意味である「ペットとして飼育された一種のヘビ」にせよ、「財宝の番人」との意味にせよ、決して後世に出現する危険なドラゴンではない。また *Oxford Latin Dictionary* においても同様に「毒のないヘビ」あるいは「宝物の番人として神聖視される」「想像上の、あるいは神話上の動物」あるいは「星座」との意味のみである¹¹。フランス語による語源辞典 *Dictionnaire Étymologique Langue Latine Histoire des Mots* の“dragon”に拠れば¹²、

1 dragon

2 serpent (poétique)

3 étendard (époque impériale)

との区別を記し、通常の「ドラゴン・ヘビ」の字義に加えて、ローマ帝政期における「軍旗」の意味が添えられている。つまり、古代ローマ時代のドラゴンには動物の形態のドラゴンと、戦旗の意味が並置されていることがわかる。さらに注目すべきは、ウェールズ語にはドラゴンに新しい字義を見出すことができる点である。

ドラゴンを示す語として少なくとも“dragon”“draig”“dragwn”の三語が存在する¹³。

11 *Oxford Latin Dictionary*, ed. P. G. W. Glare (Oxford: Clarendon Press, 1982).

12 *Dictionnaire Étymologique de la Langue Latine Histoire des Mots*, ed. A. Ernout and A. Meillet, Quatrième édition by Jacques André (Paris: Éditions Klincksieck, 1985).

13 *Geiriadur Prifysgol Cymru, A Dictionary of the Welsh Language*, Cyhoeddwyd ar ran Bwrdd Gwybodau Celtaidd Prifysgol Cymru(Caerdydd: Gwasg Prifysgol Cymru, 1950–2002).

dragon [Latin, dracon-em]

1 warrior, hero, war leader, chieftain, prince; military power

2 dragon

“dragon”においては、「戦士、勇士」の意味が第一義で、この意味の初出はウェールズ語の現存する文献としては古い12-13世紀である。また“draig”にも同じく第二義として「戦士、勇士」の意味が挙げられている。

draig [Latin, dracō > Brythonic (=Welsh, Cornish, Breton etc.)]

1 a) dragon

b) constellation called the Dragon

2 warrior, hero, war leader, chieftain, prince

3 Satan, the Devil [1551年以降の例]

4 lightning, unaccompanied by thunder; meteorite

さらに“dragwn”はスカンジナビア経由の借用語とされるが、字義的にはやはり、“dragon; warrior, hero, war leader, chieftain”で、他の二語と同じくドラゴンは「動物のドラゴン」と「武人、首長、戦いの指導者」との意味が併記されている。

英語にはドラゴンに対する語彙として“dragon”と“drake”の二語が存在する。OEDには、第一義の“a huge serpent or snake; a python”そして“a mythical monster”として1200年代の用例が挙げられており、現代英語では“dragon”が主流ではあるが、古英語のドラゴンはdrake型の綴りが多く、ベオウルフのドラゴンも“drake”が頻出する。“drake”の意味として“1.dragon, also a representation of this used as a battle-standard”と説明されており、いずれも「ドラゴン」、「ヘビ」、「軍旗」、そのほか「へび座」「流星」などの意味が中心である。中英語のドラゴンも同様の意味のヴァリエーションのみで、ウェールズ語に含まれる「武士、戦士、英雄」の意味は見当たらないのである。

3 ドラゴンは戦士か？

ブリテン島のラテン語文献でドラゴンが武人をも意味する例は、おそらくギルダス（Gildas）の例が最古なのではないか¹⁴。540 年ごろ書かれたとされるギルダスの『ブリテンの崩壊』（*De Excidio Britonum*）はローマ軍撤退に伴い防備が弱体化したブリタニアがサクソン人を初めとする民族に侵略され、崩壊するさまを嘆くラテン語文書である。

Quid tu enim, insularis draco, multorum tyrannorum depulsor tam regno quam etiam vita supra dictorum, novissime stilo, prime in malo, maior multis potentia simulque malitia, largior in dando, profusior in peccato, robustus armis, sed animae fortior excidiis, Maglocune, in tam vetusto scelerum atramento, veuti madidus vino de Sodomitana vite expresso, stolide volutaris? [Section 33]

What of you, dragon of the island, you who have removed many of these tyrants from their country and even their life? You are last in my list, but first in evil, mightier than many both in power and malice, more profuse in giving, more extravagant in sin, strong in arms but stronger still in what destroys a soul, Maglocunus. Why wallow like a fool in the ancient ink of your crimes, like a man drunk on wine pressed from the vine of the Sodomites?¹⁵ [下線筆者]

14 *Dictionary of Medieval Latin from British Sources*, prepared by R. E. Latham and D. R. Howlett (Oxford: Oxford University Press, 1975–97) において、“leader in war” の項目で Gildas の例が最古の例として引用されていることから、ブリテン島における“draco”というラテン語が武人を示す語に転換された先例といえそうである。

15 Gildas, *The Ruin of Britain and other works*, ed. and trans. by Michael Winterbottom (London and Chichester: Phillimore, 1978), p. 32 and p. 102.

引用に登場するマグロクスス (Maglocunus) とは 6 世紀に北ウェールズの一部 Gwynedd を治めたといわれる人物マエルグン (Maelgwn) だが、この場合ドラゴンと武人が同定されており、この字義は他の言語の「ドラゴン」には含まれていない点で特筆すべきであろう。ラテン語には「戦士」の意味がないにもかかわらず、古代ブリテンにおいて書かれたラテン語文書にのみ、ドラゴンを戦士の意味で用いられた用例が残存するのである。Sir Ifor Williams は帝国ローマ軍が古代ブリテンに駐屯していた際に用いた鯉幟型の旗がドラゴンと呼ばれており、ドラゴンという架空の動物を示す表象が戦いに掲げる軍旗に用いられた結果、軍を率いる戦士の先導者を意味することばに転換されたと推論している¹⁶。Rachel Bromwich はギルドラスが使用した「島の長」としての“draco”は、ウェールズ語の“draig”に含まれる「指導者」としての意味の派生的な意味と解釈し、ドラゴンの軍旗からの語源には否定的である。いずれにせよ、この「戦士」という用法こそが、後のアーサー王の年代記で用いられ、アーサーの父への異名へ、ひいてはアーサー自身の表象と連結していくことになるのである。

ブリテン島のアーサーの父ウーサー (Uther) は肩書きに“Pendradon”を冠しているように、ウェールズ語で「頭」を意味する“Pen”と「指揮官」を意味する「ドラゴン」が結び付き、「ドラゴンの長」「指揮官の中の指揮官」つまり、戦いの領袖として知られていたことになる。ウーサーは兄アウレリウスが毒殺されると、ドラゴンを天空に認め、その予兆を解するのがマーリンである。天のドラゴンの流星は、兄の死を語ったのみならず、ウーサーの末裔の繁栄をも告げたので、記念としてウーサーは戦いにいつもドラゴンを携えたという。1138年のジェフリによる『ブリタニア

16 同様の例は古ウェールズ詩の Gododdin にも三例ある。Rachel Bromwich, ed., *Trioedd Ynys Prydein, The Triads of the Island of Britain, third edition* (Cardiff: University of Wales Press, 2006), pp. 99–101. 古ウェールズ詩に残るドラゴンについては別稿で詳述したい。

列王史』の記述である。同じく、アーサー自身、兜にドラゴンをつけるなど、戦いのシンボルとしてのドラゴンと一体化するが、この箇所では紅いドラゴンと特定されているわけではない。

II アーサー王年代記におけるドラゴン

1 ネンニウスの『ブリトン人の歴史』

(Nennius, *Historia Brittonum*, 9–10 世紀頃)

紅いドラゴンが登場するのはネンニウスによる『ブリトン人の歴史』である。その緒言によれば、「私、ネンニウスは、エルボダググの学徒だが、愚かなブリトン人が破棄し省みないもろもろの抄録を作成することとした。というのも、ブリテン島の学徒たちにはその技量もなく、書に記録を残そうとする気概もないのだ。ゆえに、私はこれまで山のような資料、すなわちローマ人の年記や教父の年代記、アイルランド人やサクソン人たちが残した文献、そして我が祖先たちから伝わる文書を蒐集したのである。」このような書き出しで始まるネンニウスは、そもそもブリテンの名称の由来は何かという始原的な問いを發し、ブルータスに遡るブリテン始祖伝説の一部を開陳する。そして時代を下り、辿り着くのが古代ブリトンの王ヴォーティガーン（ラテン名：Guorthigirunus；英名 Vortigern）が築城をするエピソードである。以下、紅白のドラゴンが登場する箇所を引用する。

But he[Merlin] declared “There is a cloth in the midst of them; separate them and you will find.” The king ordered them to be separated and a folded cloth was found, as he had said. . . . So he showed them “two worms are in it, one white the other red [L: Duo vermes in eo sunt, unus albus et alter rufus]. Unfold the cloth.” They unfolded it, and found two worms, asleep. The boy said, “Wait and see what the worms do.” The worms began to drive each other out. One used his shoulders to drive the other on to a half of the cloth. This

they did three times; then the red worm was seen to be weaker, and then was stronger than the white, and drove him beyond the edge of the cloth. The one pursued the other across the lake [L: stagnum], and the cloth [L: tentorium] vanished. . . .

“This mystery is revealed to me, and I will make it plain to you. The cloth represents your kingdom, and the two worms are two dragons [L: duo vermes duo dracones sunt]. The red worm is your dragon [L: vermis rufus draco tuus est], and the lake represents the world [L: stagnum figura hujus mundi est]. But the white one is the dragon of the people who have seized many peoples and countries in Britain, and will reach almost from sea to sea; but later our people will arise, and will valiantly throw the English people across the sea.”

[下線筆者]¹⁷

古代ブリテンの王であったヴォーティガーンがウェールズの山中エリルリに砦を築こうとするが、三度とも土台が崩れてしまう。この謎を解くために父なしで生まれた子供アンブロシウス（Ambrosius、後の年代記ではマーリン Merlin）を探すこととなる。上記の引用はアンブロシウスが謎を解き明かす場面である。土台の下には湖があり、湖の下には器があり、その中に布に覆われた二頭のドラゴンがおり、両者が戦うたびに土台が地に飲み込まれるのだと告げる。ヴォーティガーンが見ている前で、眠っていた二頭のドラゴンは目を覚ますと、互いに布の上でドラゴンが戦い始める。とはいえ、その戦いぶりはあまり恐ろしげではなく、どちらかといえばのどかな雰囲気である。この作品に現れるドラゴンは引用の下線で示したように、「布」の範囲内で相手を押し出せば勝ち、しかも肩で押し合

17 *Nennius, British History and the Welsh Annals*, ed. and trans. by John Morris (London and Chichester: Phillimore, 1980), p. 31 and p. 71.

うという、いわば「押し相撲」をしており、空中戦はみあたらない。つまり、掴み合いをするための手足はあるかもしれないが（言及されていないので手足がない可能性もある）、飛ぶための翼を想定していない。ドラゴンを覆っていた布はブリテン島を表し、白いドラゴンはサクソン人、「紅いドラゴンはあなたのドラゴンです」と答えていることから、ヴォーティガーン一個人を示すとも考えられるが、古代ブリテン島の先住者古代ブリトン人の表象と解釈することもできるだろう。ここで注目したいのは下線部で「“vermis”はドラゴン“dragon”である」と言い換えている点である。英語“worm”に該当するラテン語“vermis”は、“worm”の語源であると同時に別の英語の語彙“vermin”、つまり狐やイタチ、アナグマなどの動物を含む「害獣」と訳される“vermin”の語源でもある。ラテン語“vermis”には“worm”も“vermin”も含まれていたわけである。ネンニウスの言い換えはすなわち、この場面で“vermins”は“worm”の意味で用い、それ以外の“vermin”ではないことを示唆し、ドラゴン“dragon”へと絞り込んでいることを意味するのではないか。裏を返せば、ドラゴンは“worm”、翼のない爬虫類型の姿が連想されることばであったと考えられる、少なくともネンニウスはそのように解釈をしたのである。

ネンニウスが提示したドラゴンは形態的にはヘビ型爬虫類で、寓意的な解釈から捉えればブリテン島の主導権をめぐる対立する古代ブリトン人とサクソン人のそれぞれの表象であることがわかる。この箇所はブリトン人の将来を占う、いわば予言的な寓意画であって、聖人伝に出てくるドラゴンのように周囲の者たちに直接危害を加える危険なドラゴンではない。ネンニウスの紅いドラゴンは白ドラゴンに苦戦をしながらもなんとか持ちこたえているが、古代ブリトン人のその後の運命は、サクソン人に主導権を奪われる。さらに1066年のヘイスティングスの戦いを経てハロルド王が戦死を遂げると、ブリテン島への支配権はサクソン人からノルマン人へと移行する。当然ながら、二頭のドラゴンの行く末も変化をみせることになるのである。

2 ジェフリ・オブ・モンマスの『ブリテン列王史』

(Geoffrey of Monmouth, *Historia Regum Britannie*, 1138 年頃)

1138 年頃にまとめられたといわれるジェフリ・オブ・モンマスの『ブリテン列王史』では紅白ドラゴンの命運が語られている。マーリンはトランス状態に入り予言をうたい上げるドルイド僧のような預言者である。

As Vortigern, King of the Britons, sat on the bank of the drained pool, the two dragons emerged, one white, one red [L: *egressi sunt duo dracones, quorum unus erat albus et alius rubeus*]. As they neared each other, they fought a terrible battle, breathing fire. The white dragon began to get the upper hand and drove the red to the edge of the pool. But it was irked at being driven back and attacked the white, forcing it back in turn. As the dragons fought in this way, the king commanded Ambrosius Merlin to tell him the meaning of their battle. He burst into tears and was inspired to prophesy thus:

“Alas for the red dragon, its end is near. Its caves will be taken by the white dragon, which symbolizes the Saxons whom you have summoned. The red represents the people of Britain, whom the white will oppress. Its mountains will be leveled with the valleys, and the rivers in the valleys will flow with blood. . . .

At last the oppressed will rise up and resist the foreigners’ fury. The boar of Cornwall will lend his aid and trample the foreigners’ necks beneath his feet. The islands of the ocean will fall under his sway and he will occupy the glades of France. The house of Rome will tremble before his rage, and his end shall be unknown.” [“The Prophecies of Merlin”, Book Seven, p. 144. 下線筆者]¹⁸

18 Geoffrey of Monmouth, *The History of the Kings of Britain: An Edition and*

ブリテンの覇権をめぐる争う指導者たちが動物の姿に託され登場し、ドラゴンも何度か出現する。下線部が示すように、このドラゴンは炎を吐き攻撃の威力を増しているが、この箇所では翼への言及はない。ただし、予言の後半で、「翼のあるドラゴンが翼のないドラゴンに優位に立つであろう。」(pp. 156-157) との件があることから、ヘビ型以外のドラゴンも周知していたようだ。ネンニウスと同じく紅白ドラゴンが登場するが、アンブロシウス・マーリンは「紅いドラゴンの最期は近い」と予言する。しかしその後コーンウォールから登場する「猪」が侵略者からブリテンの民を守るとも述べていることから、ブリトン人の敗北が決定的であるとはこの箇所だけでは結論付けることはできない。この箇所の眼目はブリトン人の敗北を一時的に食い止めた人物を導入することである。つまり、ブリテンの民をサクソン人から守るのはコーンウォールの猪であり、その最期は謎に包まれているとあるので、この猪はアーサー王を指し示していることがわかる。

さらに注意すべきはジェフリの作品における「ドラゴンの予言」の解釈が微妙に変化している点である。ネンニウスにおいて「紅いドラゴンはあるあなたのドラゴンです」とヴォーティガーンと同一視されていたが、ジェフリにおける「紅いドラゴンは白ドラゴンによって抑圧されるであろうブリテン島の人々」であり、白ドラゴンとの対比関係によって存在することになる。被支配民族としての赤ドラゴンへの視座が前提となる。いわば作者の後知恵として予言が語られるのであるから、時代を経れば歴史が予言の

Translation of De gestis Britonum, ed. by Michael D. Reeve and trans. by Neil Wright (Woodbridge: Boydell Press, 2007), pp. 144-145. 本書によると *De gestis Britonum* が本来の作品名であるが、本稿ではこれまで定着していた *Historia Regum Britannie* の訳語『ブリタニア列王史』を使用する。ラテン語テキストは *The Historia Regum Britannie of Geoffrey of Monmouth, Bern, Burgerbibliothek, MS. 568*, ed. Neil Wright (Cambridge: D.S. Brewer, 1984). 邦訳として近刊書がある。瀬谷幸男訳『ブリタニア列王史』(南雲堂フェニックス、2007年)。

真偽を証明してしまう。古代ブリテンの民とブリテンに侵攻する民族のいずれに主導権があるのかは歴史的に証明済みである。おのずと赤ドラゴンも変容を強いられるのである。歴史を回顧的に俯瞰すればこれはきわめて当然の結果であろう。興味深いのは中世においてマーリンの予言は作者の後知恵として捉えられたのではなく、むしろ、歴史によって真正性を「証明された」予言としての評価を高めた点である。ジェフリの歴史は発表当時からオックスフォードにおいてはとりわけ批判的な反応が大きかったもののそれは政治的な立場からの批判で、Julia Crickが指摘するように、『ブリテン列王史』はマーリンの予言ゆえに歴史書としての価値を維持しえたのである¹⁹。紅白ドラゴンの表象が予言に包含されていることはいうまでもない。それでは、ブリテンに侵攻してくる民族もサクソン人、アングル人、ゲルマン人、そしてノルマン人と変化する中で、アーサー王年代記におけるヘゲモニーはどのように呼応しているのであろうか。

3 ワースの『ブリュ』(Wace, *Brut*, 1155年)

築城の土台を揺るがす二頭のドラゴンのエピソードはジェフリの『ブリテン列王史』の以降、アングロ・ノルマン語で「翻訳」したワースの『ブリュ』、そして中英語で「翻訳」したラホモン(La3amon)の『ブルート』(*Brut*)へと受け継がれている。ジェフリ・オブ・モンマス『ブリテン列王史』ではドラゴンの戦いの結果が異なるように、ワース、ラホモンの紅白ドラゴンの描写、マーリンの予言、そしてアーサーの再臨信仰への言及はそれぞれ変容をみせるが、ドラゴンがブリテン島を支配する際の雌雄を決する民族の表象に用いられていること、その点は共通である。とりわけジェフリまでの赤ドラゴンは、ブリテン島の先住者を象徴する点は確認できるであろう。

19 Julia Crick, "Geoffrey of Monmouth, prophecy and history," *Journal of Medieval History* 18 (1992), 357-371.

ジェフリの『ブリタニア列王史』から20年足らずの1155年にワースが纏めた「翻訳」版にはマーリンの予言が割愛されている写本がある。割愛する理由は、「私ワースにはマーリンの予言がよくわからない」し、「記したことが実際と異なっても困る」ので翻訳はしないと断っている²⁰。しかしながら、予言が温存されている写本もあり、マーリンの予言を削除しない選択をした背景にはどのような工夫があるのか、写本 Durham C.IV.27 において、紅白のドラゴンの描写を考察してみよう。

Fuit s'en li ruges; mielz esteit al blanc:	The red one fled; the white one fared better:
L'autre ad chacié desqu'al chief de l'estanc,	It chased the other to the opposite end of the pool.
E il s'en dolut, si reñtrat en fierté:	The red one lamented, then recovered its power:
Le blanc assalt si'l ad mult reversé.	Then it attacks the white one, pushing it back firmly.
...	
Oiant els tuz, li reis li demande	In everyone's hearing, the king asks him
Des dous draguns, e prie e comande,	About the two dragons, and begs and orders him
Qu'il lur die la signifiçance.	To tell them their meaning.
Dunc suspire Merlin od pesance:	Then Merlin sighed deeply with grief:
Des propheties ad trait l'esperit,	He summoned the spirit of the prophecies,
E si s'escrie e puis ad al rei dit:	Cried out, and then said to the king:
"Guaiment e dolur al ruge dragun,	"Woe and sorrow to the Red Dragon,
Car mult haste sa destructiun.	For its destruction is nigh.
E ses cavernes purpendrat li blancs,	The White will take over its caves,
Ki signifie Engleis e Alemans	Which means the Angles and the Alemans
E les Sednes ki sunt attrait par vus.	And the Saxons, who have been brought here by you.
Li ruges draguns signifiçe nus	The Red Dragon signifies us
Ki de Bretaine majur sumes né;	Who were born in Great Britain;
Li blanc destreindrat nostre parenté.	The White will destroy our lineage.
[ll.159–162., ll. 167–180. 下線筆者] ²¹	

20 *Wace's Roman de Brut, A History of the British*. Text and Translation prepared by Judith Weiss (Exeter: University of Exeter Press, 1999), pp.190-191.

21 *Anglo-Norman Verse Prophecies of Merlin*, ed. and trans. by Jean Blacker (Dallas: Scriptorium Press, 2005), pp.32–33.

従前の紅白ドラゴンは二項対立的な古代ブリテン島の先住民対侵略民族サクソン人という図式が比較的明確であったが、ワースにおいては包含される民族に歴史的な注釈が加わっている。赤ドラゴンは「グレートブリテンで生まれた我々」であり、白ドラゴンはヴォーティガーンが招来した「アングル人、ゲルマン系アラマン人、サクソン人」と当該民族が拡大されているのである。この時点で歴史を回顧すれば、ブリテン島への侵略を迎える側の民族は、ノルマン人をも含むグレートブリテンに在住する者たちとなる。つまり、紅いドラゴンは政治的なヘゲモニーにおいて心情的に劣勢の立場にある側のシンボルのみならず、国家の表象として可変的な存在として作用しつつあることに気付かされるのである。また、お決まりの紅白ドラゴンの対戦の描写はあるが、どちらが勝者なのか判別が微妙である。当初優勢であった白ドラゴンが赤を追い詰めるのだが、次に紅いドラゴンが盛り返すと語られる場面でありながら、Jean Blacker も指摘するように、この箇所を温存する写本4本すべてにおいて白ドラゴンに対して“le”が用いられているために、はたして紅いドラゴンが白ドラゴンに反撃し追い詰めているのか判然としない²²。つまり意図的か否か、文脈上曖昧な解釈を許容しているのである。この曖昧さはワースがマーリンの予言を記すことへの躊躇、省略する際の断り書きに看取できる政治的な予言への警戒感とも呼応していると理解できるであろう。

4 ラホマンの『ブルート』(La3amon, *Brut*, 1200年頃)

ワースの『ブリュ』を二倍の長さに「翻案」したラホマンの『ブルート』ではドラゴンが形態的にはヘビ型へ「退化」しているようだ。

22 Ibid., p. 81.

tweien <u>draken</u> ftronge.	The two strong dragons;
þe an is a norð half:	The one is on the north side,
þe oðer a fuð half.	The other on the south side;
þe oder if milc-whit:	The one is milk-white,
ælcþe deore unnilich.	To each beast unlike,
þe oðer ræd alfe blod;	the other [as] red as blood
<u>wurmen</u> alre baldeft.	the boldest of all worms.
Aelche midderniht:	Each midnight
heo bigunneth to fihten.	They begin to fight.
...	
Ærefl wes þe white buuen:	First was the white above,
& feoððen he was bi-neoðen.	and afterwards he was beneath,
& þe drake ræde:	and the red dragon
for-wundede hine to dæðe.	wounded him to death;
and æiðer wende to his hole:	and either went to his hole,
ne i fæh heom feoððe na mon	No man born saw them afterwards.
i-boren.	

[Cotton Caligula. A. IX, ll. 15936–44, and ll. 15978–15983. 下線筆者]²³

ドラゴンの一方は北部に、もう一方は南部にいたと述べるものの、紅白どちらが北部に生息しているのか明示されていない。また炎を吹く“drake”と“worm”の両方が用いられており、ラホモンにとって両語は互換可能な言葉でもある。さらに興味深いのは「紅いドラゴンが白いドラゴンに致命傷を与えた」(“& þe drake ræde/ for-wundede hine to dæðe.”)と記しながら、二頭のドラゴンは穴に戻り、誰もその後ドラゴンを目撃した者はいないのである。紅白のドラゴンの戦いの寓意を問われれば、マーリンはこれから到来する王たちの生業すべてを語っているのだと述べ、紅白のドラゴンの表象を解説してはくれない。紅白ドラゴンはもはやブリトン人とサクソン人という民族対立概念の表象性を喪失している。この点は

23 Sir Frederic Madden, ed., *La3amons Brut, or Chronicle of Britain* (1847; New York: AMS Press, 1970), vol.2, p. 243, ll. 15936–44. 邦訳には大槻博『ブルート』(大阪教育図書、平成9年)がある。

アーサー王から数世代後のカドワラドル (Cadwaladr) の記述と照合すると、さらにラホモンの特異性が鮮明になる。カドワラドルは古代ブリテンの最後の王とされるが、その統治の末期は 11 年間の亡命生活ののち、ブリテン島に軍を率いてブリトン人の国を再建しようと決心をする。この箇所においてラホモンはさらに加筆修正を行っている。カドワラドルは挙兵するのではなくローマへ巡礼の旅に出かけ生命をまっとうせよ、とのお告げが下る。その際を守るべき指示が、イングランドには「決して」侵攻してはならない、末裔にもウェールズに留まるように告げよ、という内容である。このお告げに従って、カドワラドルはブリトン人とともにブリテンを再び治めることを断念し、ローマで死去するのである。きわめて現政権にとっては好都合な結末である。カドワラドルはローマで死去するものの、ブリテン島に将来、戻ることを約束する予言があった。マーリンの予言である。アーサー王の伝承では、ブリトン人が瀕する危急の際にはアーサー王こそが再臨するという伝承が強いが、先に論じたアーサー王年代記はすべてカドワラドルの死で締めくくられている。これは何を意味するのであろうか。

5 再臨の伝承

ジェフリもカドワラドルの再臨説には言及している。ジェフリに拠れば、カドワラドルの遺骸をローマから運び、異教徒から守るために隠匿した聖人の骨をすべて復帰させた暁にブリトン人はブリテン島を再び治めることができるであろうという。しかし聖人の遺骨の回収を課すとは、この予言が実現することを阻むための条件のようだ。事実、当代のウェールズ人はブリトン人とは異なり品性において劣り、ブリテン島を統治する事は不可能であろうと述べ、予言実現にはきわめて消極的である。ワースにおいても、マーリンの予言を省略するか、もしくは予言そのものの価値を貶める言説を取ることによって、ブリトン人による支配の芽を摘み取っているのではないか。つまり、当時のブリトン人の後継者を自認するウェールズ人

にとって、より直接的な形で政治的な復権を訴えかけたのはマーリンの予言だった。確かに、アーサーの再臨信仰は強く、その異教色を快く思わない修道士との間で暴動が発生したとのいい伝えも同じく記録されている。しかし、紅いドラゴンとの関連から考察すると、ブリトン人最後の王にまつわる再臨信仰はカドワラドルが紅いドラゴンを掲げ戦ったという伝承も付加され、アーサーよりは紅いドラゴンとの縁が強いのである。ブリタニアの歴史の空洞を埋める歴史の創出ではあったが、カドワラドルの記述で留める行為は、ジェフリ、ワース、ラホモンを通じてアングロ・ノルマン社会において、古代ブリトン人の再臨信仰ヘビリオドを打つ行為と表裏一体であろう。

ジェフリの『列王史』は今日でいうベストセラーに近いといわれている。爆発的な人気を呼んだことは、900年近く前の作品でありながら、写本が217本も現存することからも明らかである。しかもそのうち三分の二が1200年までに写字されたとさえいわれており、広範かつ時を移さぬジェフリの作品の浸透ぶりがうかがえる事象である²⁴。ジェフリが起爆剤となり、12世紀はアーサー王伝説関連の作品も飛躍的に増加する。フランスではクレティアン・ド・トロワがランスロットを創造し、「聖杯伝説」を世に送る。ジェフリから二十年足らずで自国語（vernacular）によるアーサー王年代記がワースによって、さらに4-50年以内には中英語による年代記が世に問われ、一気にアーサー王伝説の虚構化・政治媒体化も始まる。翻訳言語のラテン語からの変化には読者の変化を看取することもたやすいが、さらに選択する言語の恣意性にも注目すべきだろう。ジェフリはそれまで欠落していたブリテン島の歴史の空白を埋めるべく、「権威ある」ラテン語で記し、ワースはノルマン王朝のプランタジネット家によるブリテン支配の枠組みを補遺すべくアーサー王宮廷に円卓を提示した。ラホモンは反対に、当時でも擬古体的な中英語を選択した。支配階級の言語

24 Geoffrey of Monmouth, vii.

であるノルマン語から離れた被支配階級の言語選択である。そして、三者ともに、記録に残らないブリテン島の過去を創造（想像）し歴史の継続性を創造する作業でありながら、年代記という額縁の中にブリテン島の過去を嵌め込み、古代ブリトン人と当代のウェールズ人の隔絶化をはかるというパラドックスを孕んでいる。ブリトン人最後の王の死によって、ブリトン人の歴史の断絶を結果的に謀るのである。ことさらラホマンは、あたかもグラストンベリー寺院でアーサーの遺骨を確認するかのよう、カドワラドルの死を確認し、ウェールズ人はウェールズに留まるべきでイングランドはイングランド人の土地であると主張することによって、「人種隔離政策」の追認を行う。「ブリトン人はイングランドを失った」（“*Bruttes hit lofedenden*”, Madden, 32234 行）とのラホマンの一文に、異なる字体で「この地もこの民も」（“*þif lond and þas leode*”, Madden, 32235 行）と欄外に加筆がされているのは、『ブルート』の主張への読者の賛同であろう。

ラホマンはアーサーの再臨信仰についても、アーサー自身が生き返って戻ってくるのではなく、マーリンの予言は「アーサーのような人（“*an Arthur*”）がアングル人を救いにやってくる」（Madden, 28650 行）という意味だと言い切る。アーサー王伝説のイングランド化は、紅白のドラゴンの表象の読みにおいても、いともたやすく主客転倒をやったのけるのである。グラストンベリー寺院でのアーサー王遺骨発見事件が発生する頃、リチャード獅子心王は獅子の紋章の軍旗に加え、「紅いドラゴン」を携え戦場を駆ける。さらに、13世紀になると紅いドラゴンがウェールズを席捲するのである、それもエドワード1世が率いるイングランド軍によるウェールズ蹂躞のアイコンとして。ジェフリが語った如くカドワラドル以降、イングランドでは法の整備が進み、国の体制が整ったのに比して、ウェールズは内紛による殺戮が続き、国の弱体化が進んだ。紅いドラゴンは瀕死の状態である。マーリンの予言の如く、紅いドラゴンの巻き返しをウェールズ人はいまだ待ち望んでいるはずではあるが、はたして紅いドラゴ

ンは戻ってくるのか。ちなみに現代のユニオンジャックに紅いドラゴンの意匠を追加しようという動きもあるという²⁵。ひょっとすると、21世紀になってから紅いドラゴンの復活が現実のものとなるのかもしれない。

25 ウェールズ・レクサム選出の労働党国会議員 Ian Lucas が「紅いドラゴンが英国国旗に含まれていないのはおかしい」と2007年11月に発言したことに端を発し、Telegraph Newspaper Online 版上で読者から英国国旗の意匠を募集したところ、日本人からの投稿もあったという。人気投票ではノルウェー人による「サングラスをしたドラゴン」の図案が1位を獲得した。参考サイトは：<http://www.telegraph.co.uk/news/main.jhtml?xml=/news/2007/11/27/nflag127.xml>

本情報を提供してくれた、筆者の「自由研究セミナー：社会史としてのアーサー王伝説」を履修した学生諸君に謝意を表したい。

Synopsis

The Red Dragon in Early Arthurian Chronicles: Its transformation and political implications

Yuri Fuwa

The Red Dragon has closely been associated with the Welsh national identity, but this symbol does not appear in actual form in the Union Jack today. This paper first traces the changes of the dragon both in meaning and form, and then discusses its political connotations in early Arthurian chronicles.

The “dragon” in the Old Testament denotes a variety of animals such as fox and whale, while in Greek and Latin it simply refers to a serpent without wings. In the Ancient Roman period, the “dragon” came to have a meaning of “a battle standard” as well as “a mythical creature.” But as British Latin sources such as Gildas demonstrates, only the Welsh language adds the meaning of “a war leader” to the word, as is seen in the example of King Arthur’s father, Uther Pendragon, “the chief of the war leaders.”

The Red Dragon in Nennius is emblematic of the British people. The red dragon is, in short, the symbol of military resistance. On the other hand the White Dragon stands for the Saxons who eventually defeat the Britons. It is generally believed that Arthur fought against the Saxons and wore the dragon on his helmet. However, neither of Arthurian chroniclers such as Geoffrey of Monmouth, Wace, and La3amon mentions the red dragon as Arthur’s

standard. Both the red and white dragon suffered arbitrary interpretations during the twelfth-century under the Norman rule. The present paper argues that Cadwaladr, the last British King, who is also the last Breton hope and thereby linked with the resistance of the red dragon, was the Norman's main political concern. Their suppression of the symbolic power of the red dragon as British icon was more concerned about Cadwaladr than about Arthur.